

荻原 稔 提出 学位申請論文

『井上正鐵門中・禊教の成立と展開』審査要旨

論文の内容の要約

本論文は禊教の教祖である井上正鐵の生涯、及び数多くの門人たちの活動と思想について、これまで知られていた資料・史料の他に、三十年以上にわたる著者の調査によって得られた新たな資料・史料を参照して、体系的に論じたものである。従来の禊教研究の水準をはるかに凌ぐ、きわめて重厚なものである。

本論文は大きく三章からなり、これに序章と終章が付されている。序章では本論文の目的・構成と基本的文献の紹介の後、研究史上の意義について述べられている。明治期に遺文集や伝記が編纂されたこと、戦後、昭和四十年代に國學院大學の研究者たちにより、遺文の厳密な校訂や、伝記の比較、教団成立史の研究が進められ、以後の研究の礎石となったことが指摘されている。

第一章では井上正鐵自身のライフヒストリーに沿った教義や行法の成立過程が、周辺事項の研究成果を含めて検討されている。自分の父親や自身の宗教体験、そして神道家になるに至るまでの時期が視野に収められ、正鐵の教化活動の発生過程が丹念に整理されている。第二章では、天保末期の井上正鐵自身による活動から、明治前期の教派神道成立期をつなぐ後継者たち（門中）の模索的な教化活動の実態が明らかにされている。第三章では、政府からの公認を受けたものの、内部で統一の取れない「吐菩加美講」と、当時の混乱から抜け出て神道教派としての独立を目指した坂田鐵安の教会の関係が示される。さらに大成教の傘下に入ってやがて衰微していった教会の今日に至るまでの展開が論じられている。終章では、著者の研究の目的とするところが再度確認され、今後の課題が述べられている。

「第一章井上正鐵の思想と行法の成立と展開」は、以下の六つの節からなる。
「第一節 井上正鐵門中の現存行法の諸相」、「第二節 井上正鐵の思想と行法の源泉」、「第三節 教化活動の準備と展開」、「第四節 井上正鐵の教化活動」

「第五節 白川家との相互関係」、「第六節 三宅島での活動と門中」。

残された資料と現在まで伝えられている行法とを重ね合わせて検討した結果、井上正鐵の行法の基本形は、無声の深呼吸と、一定の誦詞を大声でリズムカルに繰り返して唱え続ける行の組み合わせであると結論づけられている。またその思想と行法の源泉として、救済の志の原点である父の安藤眞鐵、具体的な救済技術としての医術の師である磯野弘道、観相と慎食による開運思想の師である水野南北、救済の根元をなす「信心」の師である未詳の女性導師、神道の伝統と神職としての社会的な活動の根拠となる神祇伯白川家の五つが挙げられている。

最晩年の三宅島での活動については、熱病等の治療、助産術や養蚕の技術指導、貯水池の試作などにより島民の生活向上に尽力するとともに、自宅や鎮守の神社での教化活動を行ったこと、本土の門中に対しては、物資の送付や拠点作りへの資金援助などを依頼しつつ、書簡による指導を行ったことなどが指摘されている。

「第二章 初期井上正鐵門中の展開」は、以下の七つの節からなる。「第一節 初期井上正鐵門中の活動の概要」、「第二節 妻安西男也の生活と活動」、「第三節

三浦知善の活動」、「第四節 野澤鐵教と加藤鐵秀の活動」、「第五節 高声念仏の展開」、「第六節 備前開教者伊藤祐像の活動」、「第七節 坂田鐵安の活動」。

正鐵の弟子たち（門中）の活動の状況が、正鐵の遠島（一八四三年）から明治維新後の布教公認（一八七二年）に至るまでの時期にわたって、残された手紙類などに基づき詳細に検討されている。この間の門中の活動については、梅田神明宮での三年間、三宅島に遠島となった正鐵が存命中の六年間、活動沈滞の五年間、安政の復興後の八年間、文久の取締から布教公認までの十年間という五つの期間に区分した上で、それぞれの時期における展開過程が考察されている。門中は三度にわたる取り締まりを経験するが、文久二（一八六二）年の二度目の取締により、有力教師が所払に処せられたことで、かえって活動継続の可能性を模索した多様化と広域化が進んで明治を迎えたという分析がなされている。

「第三章 教派神道としての禊教の成立と展開」は次の三節からなる。「第一節 「吐菩加美講」の成立と分裂」、「第二節 「大成教禊教」諸教会の変遷」、「第三節 「禊教」の独立と展開」。

ここでは神道教派としての組織化と、今日に至るまでの展開過程が考察されている。東宮千別による準備過程、平山省齋が〈禊教総管〉に就任したことによる教団体制の強化、東宮千別、平山省齋没後のまとまりの弱まりが明らかにされている。

このように、本論文においては、井上正鐵とその後継者たちによる約百五十年にわたる教化活動の展開過程が、きわめて実証的に跡付けられている。またいずれの節にも「はじめに」と「まとめ」があり、それぞれの節の目的とするところと結論とが明確に述べられている。

資料編も充実している。出典を明示したきわめて詳細な年表が付されている他、「井上正鐵門中関係地図（天保年間から明治二十年代まで）」、「井上正鐵門中道統・教会系統略図」などの資料も作成されている。門人の分布や系統が一覧できる非常に有益なものであるが、多大な労力を費やして作成されたものであることが分かる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦前に神道十三派と称された教派のなかで、研究の蓄積が比較的乏しかった部類に属する禊教に関して、長年にわたる調査研究を踏まえて、非常に緻密な考察を加えたものであり、研究史的に高く評価される。

禊教の教祖井上正鐵は幕末に江戸で行った宗教活動が問題視され、天保十四（一八四三）年に寺社奉行より三宅島への遠島を申し付けられ、同島に配流となり、嘉永二（一八四九）年に同地で死去している。教祖が処罰され配流先で死去するというような事態は、他の神道教派の形成過程には見られず、これにより禊教の展開はきわめて複雑なものとなった。通常は教祖が晩年に至るまで教派形成の中核に位置し、その後継者によって組織が展開していく。しかし、禊教の場合、運動が始まってまもなく教祖が配流処分を受けたことで、運動の初期の段階から複数の核ができることになった。多くの弟子たち（門中）が、各地で正鐵の教えを広めようとしたからである。これが禊教全体についての体

系的研究を困難にしてきた大きな理由の一つであるが、本論文は多様に分かれて展開した組織について、多くの資・史料の収集と実態調査とを根気強く続け、その全貌を明らかにするに至っている。

門中の活動の流れは、大きく分けるならば、現在の禊教につながる系譜と、大成教に所属して活動した系譜との二つがあるが、現在の禊教につながる系譜以外の研究は従来きわめて乏しかった。さらにそれ以外の小規模な流れについては、ほとんど研究がなされていなかった。本論文はそれらをほとんど余すことなく調べ、これまで不明であった門中の活動についても明らかにした。これにより門中の活動が関東にとどまらず、日本全国の広い地域でなされてきたことを明確に実証している。

正鐵と門中とがどのようなつながりを保ったかは、両者が交わした手紙類によって基本的なことが知れるが、その内容については、まさに一言一句、細心の注意を払って検討されている。三宅島に配流されてからのやりとりは、言外に思いを伝えなければならぬ局面もあったと考えられるが、その点も考慮しつつ

分析がなされている。

複雑な禊教の展開を考える上では、どの人物がどのような役割を果たしたかについての分析が重要となるが、本論文ではいずれかの系統（道統）の立場に偏ることなく、客観的な把握に努めており、信頼の置ける分析結果をもたらしている。

明治維新後、禊教が一派独立したのは一八九四年のことであり、神宮教、大社教、扶桑教、実行教、神習教、大成教、御嶽教の七教派が一派独立を公認された一八八二年から十二年遅れている。だが、幕末期の厳しい取り締まりと対比すると、維新後の活動はかなり自由なものになった。その背景には門中に多くの武士階級が含まれていたことが考えられ、そうした人脈が有した機能についても的確にまとめてある。さらに教派神道体制が安定化した明治中期以降の禊教の複雑な展開についても、分析が加えられているので、今日の禊教の活動や組織の特徴を理解する上で、非常に有用である。

地域的展開という面においても、門中の日本全国にわたる活動がつぶさに調べられており、その全容が明らかにされている。巻末に記された一覧は、門中

同士の細かな関係も踏まえて作成されたもので、これにより幕末から明治にかけてどのような組織が形成され、また消滅したかも分かる。現存する十九の会がどのような道統関係に属するかが説明され、かつ図示されており、非常に明快である。

四十頁にわたる年表は出典が逐一明記され、付属資料の地図、関係図とともに、研究者にとって利用価値の高いものである。索引が必ずしも網羅的でないことが唯一惜しまれる点である。

著者はこれまではほとんど知られていなかった門中活動についても多くの資・史料を発掘した。フィールドワーク等によって関係者の談話を収集し、現況も把握して、井上正鐵とその後継者たちの活動を、現在に至るまで綿密にたどっている。従来の禊教に関する研究が、ほぼ全面的に教団資料に準拠したものであるのに対し、独自に収集した資・史料を用いての研究は、きわめて学術的意義の高いもので、今後の禊教研究、さらに教派神道研究全般に対しても、多大な貢献をなすものと評価できる。

以上の審査結果によって、本論文の提出者萩原稔は、博士（宗教学）の学位を授与せられる資格があると認める。

平成三十年十二月五日

主 査	國學院大學客員教授	井 上 順 孝	⑩
副 査	國學院大學教授	遠 藤 潤	⑩
副 査	東京工業大学教授 國學院大學兼任講師	弓 山 達 也	⑩

荻原 稔 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、本大学院の博士課程において所定の単位を修得した者と同等以上の学力を有することを確認した。

平成三十年十二月五日

学力確認担当者

主 査	國學院大學客員教授	井 上 順 孝	印
副 査	國學院大學教授	遠 藤 潤	印
副 査	東京工業大学教授 國學院大學兼任講師	弓 山 達 也	印